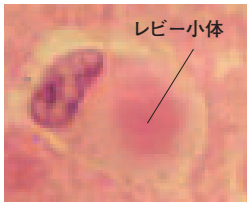
レビー小体型認知症

レビー小体型認知症は、日本で発見された病気です。アルツハイマー病と間違えて診断されているケースが少なくありません。正確に診断すれば、脳血管性認知症よりも多い病気だとも言われています。アルツハイマー病とは症状の現れ方が少し異なります。

▶原　因

脳の神経細胞の中に、ある種のたんぱく質が固まって「レビー小体」ができることが、この病気の原因です。レビー小体は、パーキンソン病の原因にもなっていますが、それが出現するのが記憶などに関係する部分だと、認知症になるのです。



脳の神経細胞にできた「レビー小体」

▶発症年齢

高齢者に多く発症しますが、より若い世代の人にも発症することがあります。

症状については、p.16-21に、より詳しく書いてあります。

▶症　状

記憶障害や「いつ」「どこ」がわからなくなる見当識障害は、アルツハイマー病の場合ほど強くありません。多くの場合、そうした中核症状よりも、周辺症状の方が先に現れます。例えば、具体的な内容の「幻視」がしばしば現れますし、「抑うつ」や「妄想」が現れることもあります。

こうした症状は、時間帯によって日によって、目立ったり目立たなかったりします。また、筋肉がこわばったり、動作が遅くなったりするなど、パーキンソン病でよく見られる症状が現れることもあります。

▶その他の特徴

- 男性に多い
- 初期のころは、もの忘れを自覚している
- 被害妄想やしっと妄想が起こりやすい
- 画像検査では認知症の割に脳の萎縮が軽い

「軽度認知障害」が注目されています

診断技術が進歩する中で、最近、「軽度認知障害」という言葉が使われるようになってきました。認知症の予防との関連で注目されています。

▶認知症ではありません

軽度認知障害は認知症ではありません。しかし、まったく健康な状態でもありません。認知症になる前の段階、つまり健康な状態と認知症の間の段階、とお考えください。「老化に伴うもの忘れ」よりは記憶障害が進んでいますが、それ以外の脳の機能は保たれており、日常生活は何の問題もなく送れています。

▶何もしないと半数が認知症に

認知症の前段階と言っても、軽度認知障害の人が、将来、必ず認知症になるとは限りません。そのまま治療を受けなくても、半数は認知症にならないと言われています。しかし、逆に言えば、何もしなければ、半数の人は認知症になる可能性があるのです。

最近の研究では、軽度認知障害の人が適切な治療を受ければ、認知症の発症を防いだり、発症を遅らせたりできることが、わかってきています。早期診断で軽度認知障害が発見されれば、一生、認知症にならなくても済むかもしれないのです。早めに専門の医師に相談することの大切さを、あらためてご理解いただけるかと思います。

▶対処法

趣味を楽しんだり人と話したりして、脳を活性化することが有効だと言われています。また、食生活の改善や運動不足の解消など、ライフスタイルを見直すことも大切です。

場合によっては、脳の代謝をよくする薬やアルツハイマー病の治療薬を使うこともあります。

認知症の予防については、p.32-35でも説明しています。

薬を使った治療については、p.28-29を参考にしてください。

※認知症には、「アルツハイマー病」「脳血管性認知症」「レビー小体型認知症」以外にも、さまざまな病気があり、治療法が異なります。
※「若年認知症」という言葉は、65歳未満で発症した時に使われます。「アルツハイマー病」などさまざまな病気で症状が現れます。